

札幌大学総合研究 第2号 (2011年3月)

〈論文〉

韓国語訳『源氏物語』巻名について

田中 幹子
金 智慧

〈要旨〉

韓国は隣国であり、文化的にも言語的にも類似世界を持つ。しかし同じ漢字語圏といえども、その文字から受ける印象は異なる。まして『源氏物語』の巻名は、歌語に基づいたものであり、歌語としての知識を承知した上で、巻の主題を理解しなければならない。その意味では本文の訳以上に、翻訳をするのは困難である。本稿では、『源氏物語』の巻名の翻訳の現状について金智慧氏の調査に基づき報告し、翻訳された巻名の妥当性について考察した。その結果、無理に意識や漢字の訓訳をするのではなく、異国の言葉として音をハングルで伝え、巻名に込められた意味を解説すべきであると提案する。

〈キーワード〉

『源氏物語』 韓国語訳 巻名 歌語

はじめに

現在『源氏物語』は、20カ国以上に翻訳されている。翻訳するにあたって、本文の筋を追って物語を理解すること以上に、巻名の翻訳は困難であると思われる。なぜなら、『源氏物語』の巻名は、その巻に込められた思いを理解しないと訳せないからである。¹⁾ 清水婦久子氏は、『源氏物語』古注諸本が巻名の分類に重点をおいていた事を指摘された上で、巻名は『源氏物語』以前に既に歌語、若しくは歌語的なものとして、当時の人々に認知された歌にまつわる物語を連想させる言葉であり、その巻を構成する発想の基となったものであることを考察された。²⁾ つまり巻名は、各巻の物語を作りあげる発想の土台となったものなのである。

本稿では、韓国中央大学日本語学科の金智慧氏とともに、現在手に入る韓国語訳『源氏物語』が、どのように工夫して巻名を翻訳しているかを調査した。その上で歌語が持つて

いる和歌世界をどのように巻名として翻訳することが望ましいかを考察していきたい。

—

韓国語訳『源氏物語』が、それぞれどのように巻名がつけられているかを田溶新訳、金蘭周訳、金鐘徳訳の順で『源氏物語』の巻順に比較表を作った。それぞれ、田訳、金訳、鐘訳と略称する。³⁾ カタカナ表記は、ハングルで、音として再現していることを示す。⁴⁾ 但し、韓国語では長音がないために、例えば、「유가오 (ユガオ)」のような表記となる。

	전용신(田訳)	김난주(金訳)	김종덕(鐘訳)
1. 桐壺	오동의 방 桐の部屋	기리쓰보 キリツボ	기리쓰보 キリツボ
2. 帚木	비나무 ほうき木	하하키기 ハハキギ	땀싸리 帚木
3. 空蟬	매미 허물 蟬の抜け殻	매미 허물 蟬の抜け殻	우쓰세미 ウツセミ
4. 夕顔	메꽃 昼顔	밤나팔꽃 夜顔花	유가오 ゆガオ
5. 若紫	어린 보라 幼い紫	어린 무라사키 幼いムラサキ	와카무라사키 ワカムラサキ
6. 末摘花	끝 따는 꽃 末摘む花	잇꽃 紅花	스에쓰무하나 スエツムハナ
7. 紅葉賀	단풍놀이 紅葉狩り	단풍놀이 紅葉狩り	단풍놀이 紅葉狩り
8. 花宴	벚꽃잔치 桜花の宴会	꽃놀이 花見	벚꽃놀이 桜花見
9. 葵	접시꽃 축제 葵花祭り	접시꽃 축제 葵花祭り	아오이 アオイ
10. 賢木	비쭈기나무 榊	비쭈기나무 榊	비쭈기나무 榊
11. 花散里	꽃 지는 마을 花散る村	꽃 지는 고을 花散る郡	하나치루사토 ハナチルサト
12. 須磨	수마 須磨	스마 須磨	스마 須磨
13. 明石	명석 メイセキ	아카시 明石	아카시 明石
14. 滯標	수로 말뚝 水路の杭	수로 말뚝 水路の杭	수로 말뚝 水路の杭
15. 蓬生	우거진 싹 生い茂った蓬	무성한 싹 蔓延った蓬	싹대밭 蓬生い茂る荒地

韓国語訳『源氏物語』巻名について

16. 関屋	관문 関門	관문 関門	관문지기 関守
17. 絵合	그림 시험 絵 試合	그림 겨루기 絵競い	그림 겨루기 絵競い
18. 松風	솔바람 松風	솔바람 松風	솔바람 松風
19. 薄雲	얇은 구름 薄い雲	실구름 糸雲	얇은 구름 薄い雲
20. 朝顔	나팔꽃 朝顔	나팔꽃 朝顔	아사가고 アサガオ
21. 少女	소녀 少女	무희 舞姫	소녀 少女
22. 玉鬘	옥 다리 玉 橋	머리 장식 髪の装飾	다마카즈라 タマカズラ
23. 初音	첫 울음 初鳴き (泣き)	첫 새 울음소리 初ての鳥の鳴声	첫 노래 初歌
24. 胡蝶	나비 蝶	나비 蝶	호접 胡蝶
25. 蛍	반디 蛍	반딧불 蛍	반딧불이 蛍
26. 常夏	패랭이꽃 撫子	패랭이꽃 撫子	패랭이꽃 撫子
27. 篝火	화톳불 篝火	화톳불 篝火	화톳불 篝火
28. 野分	태풍 台風	태풍 台風	태풍 台風
29. 行幸	나들이 余所行き	행차 御出座し	행차 御出座し
30. 藤袴	난초 蘭草	등골나물 藤袴	등골나물 藤袴
31. 真木柱	노송 기둥 檜柱	노송나무 기둥 ひのきの柱	마키바시라 マキバシラ
32. 梅枝	매화 가지 梅の枝	매화나무 가지 梅木の枝	매화 가지 梅の枝
33. 藤裏葉	등의 속잎 藤の中葉	등나무 어린 잎 藤木の若葉	등나무 속잎 藤木の中葉
34. 若菜上	봄나물1 春菜 1	봄나물 상 春菜 上	봄나물 상 春菜 上
35. 若菜下	봄나물2 春菜 2	봄나물 하 春菜 下	봄나물 하 春菜 上

36. 柏木	떡갈나무 柏木	떡갈나무 柏木	가시와기 カシワギ
37. 横笛	젓대 横笛	젓대 横笛	횡적 横笛
38. 鈴虫	청귀뚜라미 松虫	방울벌레 鈴虫	청귀뚜라미 松虫
39. 夕霧	저녁 안개 夕霧	저녁 안개 夕霧	유기리 ユギリ
40. 御法	불법 仏法	법회 法会	불법 仏法
41. 幻	환상 幻想	환술사 幻術士	환상 幻想
雲隠	자취를 감추다 跡をくらす	구름 저 너머로 雲の向こうに	승천 昇天
42. 匂兵部卿	내궁 匂宮	향내 나는 분 香りする方	니오병부경 ニオ兵部卿
43. 紅梅	홍매 紅梅	홍매 紅梅	고바이 ゴバイ
44. 竹河	대의 내 竹の河	다케 강 竹河	다케카와 タケカワ
45. 橋姫	다리 아씨 橋姫	하시 히메 ハシヒメ	하시히메 ハシヒメ
46. 椎本	참나무 기둥 くぬぎの柱	메밀жат밤나무 椎	모밀жат밤나무 椎
47. 総角	갈래머리 分け髪	갈래머리 分け髪	잠자리매듭 総角結び
48. 早蕨	햇고사리 早蕨	햇고사리 早蕨	햇고사리 早蕨
49. 宿木	겨우살이 宿木	겨우살이 宿木	겨우살이 宿木
50. 東屋	정자 東屋 (亭)	정자 東屋 (亭)	정자 東屋 (亭)
51. 浮船	뜬 배 浮いた船	떠다니는 배 漂う船	우키후네 ウキフネ
52. 蜻蛉	하루살이 蜻蛉	하루살이 蜻蛉	하루살이 蜻蛉
53. 手習	습자 習字	습자 習字	습자 習字
54. 夢浮橋	꿈속의 다리 夢の中の橋	헛된 꿈의 배다리 儚い夢の船橋	꿈의 부교 夢の浮橋

二

韓国語訳『源氏物語』の巻名については、李芝善氏が、田訳と柳呈訳について巻名の韓国語訳の方法を五つのパターンに分けている。⁵⁾いくつか李氏の見解に疑問を持つ点を李氏の分類用語に従ってあげたいと思う⁶⁾。

まず、「日本語の音をそのまま表記した巻名」として李氏が分類したものに、田訳の「須磨」の例を挙げているが、これはむしろ「漢字を音読みにした巻名＝音読み＋音読み」と李氏が分類したものに該当するものであると思う。なぜなら、「須磨」という漢字の「須」は韓国語で「모름지기 (ム), 수염 (ム)」と読み、「磨」の漢字は「갈 (マ)」と読むので、これを合わせて「須磨」を読むと「수마」になるわけである。田訳の場合「須磨」は「수마」と訳している。田訳の場合、殆どの固有名詞を韓国語の漢字を音読みしたもので、「須磨」の巻名だけ日本語の音をそのまま表記したとは思われない。また「漢字を訓読みにし、組み合わせた巻名＝訓読み＋訓読み（ただし、訓読み＋意識、漢字の音読み＋意識は全て意識と見なし除く）」と李氏が分類したものの中で、「御法」の場合は田訳の場合「불법 (仏法)」と訳しており、李氏の分類に含まれないと思う。「御法」は韓国語で「御」の場合、「거느릴 (어) 막을 (어) 맞을 (어)」で、「法」は「법 (법)」と読む。

また李氏の韓国語の見解に対してもいくつか異を唱えたい。まず、「仮に漢字を知っているとしても、「横笛」「明石」のように本来、韓国語に存在しない言葉であるなら、いくら漢字で書かれていても理解できないのである。」と述べているが、「横笛」の場合、韓国語に存在する言葉である。

さらに「「공주 (ゴンジュ)」とは、プリンセスのことで、王女のことを言うが、韓国語の漢字「姫」の訓読みには、王女の意味はなく、田溶新訳と同様、「脚の綺麗なプリンセス」を連想させる違和感を与える訳になっているからである。」と述べているが、「姫」の韓国語の漢字は「姫」であり、これは「姫」の本字で、この「姫」字には女王という意味が含まれている。

この他にも「例えば、単純に「薄雲」を、薄くかかった雲という日本語の意味に合わせ韓国語の漢字に置き換えると、淡雲になる。韓国での「薄」の使い方は、薄待、薄徳、薄利などで、「薄雲」という漢字名詞は使わない。「薄」を使わず「淡」という漢字を使う。」と述べているが、「薄雲」という言葉は韓国語でもあり、「薄雲」は「박운」と読み、薄くかかった雲となる。「淡雲」は「담운」と読み、薄く澄みかかった雲」という意味で「澄む」という意味を含むため『源氏物語』の「薄雲」の訳としては適切な言葉ではない。

さらに「빈 (鬢)」という韓国語は、日本語の「鬢」と違って、「귀밑머리 (額の中心で髪を沸け、後ろで一つに結んだ髪型)」を示す。また、もし、漢字をそのまま韓国語の音読みにして「옥빈 (玉鬢)」は「若くて美しい女性の顔」という原文とは違う意味になる。」と述べているが、「玉鬢」を韓国語で音読みすると「옥빈」ではなく、「옥만」である。「빈」と読み、「귀밑머리 (額の中心で髪を沸け、後ろで一つに結んだ髪型)」の意味を持っている漢字は「鬢」ではなく「鬢」である。その証拠として、田溶新訳の『源氏物語』では人物名の「玉鬢」は「옥만」と読んでいることが確認できる。

なお、李氏は、金蘭周訳が瀬戸内寂聴氏の現代語訳⁷⁾を訳したものであり『源氏物語』の原作を参考にしていないため扱わないとするが⁸⁾、巻名を比較する上では、金訳を対象にすることには問題ないはずである。田溶新訳も日本古典文学全集の現代語訳を参考したものであり、柳呈訳の場合も与謝野晶子の現代語訳を参考にしたことが金鍾徳氏によって明らかになっており、金蘭周訳を比較対象にしなかったことの原因としては適切ではないと思う⁹⁾

三

三者の巻名を比較すると、鐘訳の巻名は、「桐壺」「空蟬」「夕顔」「若紫」などの巻名を、日本語音をそのままハングルにしていることがわかる。これは、人名・地名など固有名詞をそのまま日本語音をハングルにするという方針をとっているためである。

金訳とともに、新日本古典文学全集の巻名の解説と比較して載せたい。紙面の都合上「濔標」巻までの解説についてとりあげた¹⁰⁾。

第一巻 桐壺¹¹⁾

新全集：桐壺：光源氏の母更衣の局の名による。「桐壺」は帝の居所、清涼殿から最も遠い東北隅にあった淑景舎の通称。巻の異称に「壺前栽」（更衣を喪った桐壺帝の悲傷の場面による）、また「かかやく日の宮」（藤壺の宮の呼び名による）とも。

田：1. 겐지의 어머니인 갱의 (更衣) 의 이름. 호 (壺) 는 옛 궁중의 방. 오동의 방이라는 뜻. 기리쓰보 (きりつぼ) 라 읽는다.

1 桐壺：源氏の母親である。更衣の名前。壺は昔の宮中の部屋。桐の部屋という意味。キリツボと読む。

金：제1첩 기리쓰보 (桐壺)

겐지의 어머니인 갱의 (更衣) 의 처소를 '기리쓰보' (桐壺) 라 하고, 기리쓰보를 사용하는 갱의라 하여 겐지의 어머니를 '기리쓰보 갱의' 라 한다. 기리쓰보는 천황의 처소인 청량전 (清涼殿) 에서 가장 멀리 있는 숙경사 (淑景舎) 의 통칭이다.

第一帖 桐壺：源氏の母親である更衣の処所を「桐壺」といい、桐壺を使う更衣と言
って、源氏の母親を「桐壺更衣」という。桐壺は天皇の処所である清涼殿から一番遠
くある淑景舎の通称だ。

田氏の桐の部屋という解説では、桐材で作られた部屋のような印象を受ける。光の母、
桐壺更衣の部屋である淑景舎の通称であり、清涼殿から遠い場所であることが説明されて
いる意味では金氏の解説は適切である。ただ、日本では、人物呼称の際、その人の住んで
いる場所で人の呼称とすること、また、桐が紫色であり、紫のゆかりの出発点であること
を指摘すべきである。

第二巻 帚木

新全集：帚木：「帚木」は遠くからは見えるが近寄ると見えなくなるという伝説上の
木。巻末近い源氏と空蟬の贈答歌「帚木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬ
るかな」「数ならぬ伏屋に生ふる名のうきにあるにもあらず消ゆる帚木」による。

田：2.겐지와 공선의 증답가에 나온다. 추목(帚木)의 나뭇가지 끝은 비 같고 멀리
서 보면 보이거나, 가까이에서는 보이지 않는다고 한다. 호오키기(ほうきぎ)라고 읽는
다 2 帚木：源氏と空蟬の贈答歌で出る。帚木の枝の末は帚のようで、遠くから見ると
見えるが、近くでは見えないといわれる。ホウキギと読む。

金：제2첩 하하키기(帚木)

‘하하키기’는 멀리서는 보이지만 가까이 다가서면 보이지 않는다는 전설상의 나무
이다.

第二帖 帚木：「帚木」は遠くでは見えるが、近寄ると見えないという伝説上の木だ。

帚木は、遠くから見えるが近寄ると見えなくなる伝説上の木であり、本来実在しないも
のである。その印象が空蟬との恋に重なる巻名である。田氏は「箒」の文字から、枝の末
が箒のような実在の木と解説している点が問題である。金氏の伝説上の木という解説は適
切であるが、歌語であることを指摘すべきである。

第三巻 空蟬

新全集：「空蟬」は蟬、また蟬の脱け殻。源氏の歌「空蟬の身をかへてける木のもと
になほ人がらのなつかしきかな」と、空蟬の歌「空蟬の羽におく露の木がくれてしの
びしのびにぬるる袖かな」による。

田：3.겐지와 공선이 주고받은 노래에 나온다. 공선(空蟬)이란 ‘매미 허물’ 이라
는 뜻이고, 여기서는 겐지의 애인을 가리킨다. 우쓰세미(うつせみ)라 읽는다.

空蟬：源氏と空蟬がやりとりした歌で出る。空蟬とは「蟬の抜け殻」という意味で、ここでは源氏の恋人を指す。ウツセミと読む。

金：제 3첩 매미 허물 (空蟬)

空蟬은 ‘우쓰세미’ 라 읽고, ‘매미’ 또는 ‘매미 허물’ 을 뜻한다. 또한 이 첩에 등장하는 매미 허물 같은 여인의 이름이기도 하다.

第三帖 空蟬：「空蟬」は「ウツセミ」と読んで、「せみ」または「せみの抜け殻」を意味する。またこの帖に登場する蟬の抜け殻のような女人の名前でもある。

光が忍んできた際、空蟬が衣から抜け出して逃げた。残った衣を光が持ち去り、思いを和歌に訴える。空蟬は光に惹かれながらも身の程を考え拒む。そして一人偲び泣きをする和歌が主題となっている巻である。その思いを説明せずに、田氏の「「蟬の抜け殻」という意味」や、金記の「蟬の抜け殻のような女人」という解説は、彼女の個性を誤解させる。

第四卷 夕顔

新全集：夕顔：夕顔と源氏の「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」「寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔」という歌のやりとりによる。

田：4.매꽃은 여름 저녁 때 크고 향기로운 나팔꽃 비슷하게 피는 꽃을 말한다. 여기서 켄지가 만난 여인의 이름이다. 두중장의 애인. 유우가오 (ゆうがお) 라 읽는다.夕顔：昼顔は夏の夕べに大きくて香ばしい朝顔が咲くのと似てる花をいう。ここでは源氏が会った女人の名前だ。頭中将の恋人。夕顔と読む。

金：제4첩 밤나팔꽃 (夕顔)

夕顔은 ‘유가오’ 라고 읽으며, ‘밤나팔꽃’ 이라는 뜻이다. 동시에 이 첩에 등장하는 여인의 이름이기도 하다.

第四帖 夕顔：夕顔は「ユガオ」と読み、「夜顔」という意味だ。同時にこの帖に登場する女人の名前でもある。

光は、薄暮の中、今までみたこともないぼんやりと白く浮かびあがる夕顔の縁で雅な女君と出逢う。田氏の「大きくて香しい朝顔に似てる花」や、金氏の「夜顔」では、夕まぐれ時、卑俗な場で思わぬ出逢いをした謎めいた夕顔の特徴が伝わらない。

第五卷 若紫

新全集：若紫：「若紫」は、春、萌え出た紫草。紫のゆかりに執心する源氏の歌「手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草」による。巻名によって『伊

『勢物語』初段の影響を暗示。

田：5. 어린 자의상. 자의상은 겐지의 미래의 배필이 될 어린 소녀의 이름. 겐지의 노래에 나온다. 와카무라사키 (わかむらさき) 라 읽는다.

.若紫：幼い紫の上。紫の上は源氏の未来のつれあいになる幼い少女の名前。源氏の歌に出る。ワカムラサキと読む。

金：제 5 첩 어린 무라사키 (若紫)

若紫는 ‘와카무라사키’ 라고 읽고, 봄에 새싹이 튼 지치 또는 연보랏빛을 뜻한다. 이 첩에서 겐지는 연모하는 후지쓰보의 핏줄이며 평생의 반려가 될 무라사키와 운명적인 만남을 갖는다. 어린 시절의 그녀를 ‘어린 무라사키’, ‘무라사키 아씨’ 라고 한다

第五帖 若紫：若紫は「ワカムラサキ」と読み，春に若芽が生えた紫または薄紫色を意味する。この帖で源氏は恋慕する藤壺の血筋であり，一生の伴侶になる紫と運命的な出会いを持つ。幼い頃の彼女を「幼い紫」「紫お嬢さん」と言う。

藤壺の紫のゆかりの姫君との出会いが主題である。田氏は，藤壺とのゆかりの君であることが解説されていない。金訳も，「春に若芽が生えた紫または薄紫色を意味する。」と紫草を誤って認識している¹²⁾

第六卷 未摘花

新全集：未摘花：「未摘花」は紅花の異名。赤い花が咲く。源氏の歌「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけむ」による。

田：6. 겐지의 노래에 나온다. 끝 따는 꽃이라는 의미. 말적화 (未摘花) 는 홍화 (紅花), 홍람화 (紅藍花), 잇꽃이라고도 하는데, 영경귀과에 따른 월년초이다. 높이는 1m정도로 여름에 여뀌꽃 비슷한 두상화가 핀다. 여기서는 여인을 지칭한다. 스에쓰무하나 (すえつむはな) 라 읽는다. 未摘花：源氏の歌にでる。未摘む花という意味。未摘花は紅花，紅藍花，紅ともいうが，あざみ科の多年草だ。高さは1m程で夏にたで花と似てる頭上花が咲く。ここでは女人を指す。スエツムハナと読む。

金：제 6 첩 잇꽃 (未摘花)

未摘花는 ‘스에쓰무하나’ 라고 읽고, ‘잇꽃’ 이라는 뜻이다. 잇꽃은 빨간 꽃이 핀다. 이 첩에 등장하는 여인의 코가 빨갱다 하여 이런 이름이 붙었다

第六帖 未摘花：未摘む花は「スエツムハナ」と読み，「紅花」という意味だ。「べにばな」は赤い花が咲く。この帖に登場する女人の鼻が赤いといってこういう名前が付けられた。

鼻の先が紅の女君に因んだ巻名である。本来は、美しい花の名であるのを、逆手にとって極端に醜い容貌としている点が斬新であり、紫色との対比の意図がある。

第七巻 紅葉賀

新全集：紅葉賀：紅葉の美しい神無月に、朱雀院の御賀が催されたことによる。「紅葉賀」という言葉は、この巻の本文中には見えないが、次の花宴の巻にこの朱雀院の行幸をさして「御紅葉の賀」と言っているところがある。

田：7. 단풍의 하연 (賀宴) . 단풍이 아름다운 10월에 주작원 (朱雀院) 에서 축하하는 연회가 있었다. 모미지노가 (もみじのが) 라 읽는다. 紅葉賀：紅葉の賀宴。紅葉が美しい10月に朱雀院で祝う宴会があった。モミジノガと読む。

金：제 7 첩 단풍놀이 (紅葉賀)

단풍이 아름다운 음력 시월에 주작원에서 단풍 연회가 있었다. 본문에 단풍놀이란 말이 등장하지는 않지만, 제 8 첩 「꽃놀이」 첩에서 천황의 주작원 행차를 가리켜 ‘단풍놀이’, ‘단풍 연회’ 라 지칭하는 장면이 있다.

第七帖 紅葉賀：紅葉が美しい陰暦10月に朱雀院で紅葉の宴会があった。本文に紅葉狩りという言葉は登場しないが、第8帖「花見(花の宴)」帖で天皇の朱雀院の御出座しを指して「紅葉狩り」「紅葉宴会」と称する場面がある。

巻名の「賀」が訳されていないが、解説では紅葉の宴会とされている。この催しがこの巻の主題であるため、巻名にも「賀」の催しであることを含む訳語の方が適当であろう。身重の藤壺のための試楽であり、光が思いを込めて青海波を舞って二人が歌を交わしたことにふれるべきであろう。

第八巻 花宴

新全集：花宴：巻頭に、「南殿の桜の宴せさせたまふ」とあるのによる。

田：8. 권두에 “ ‘벚꽃’ 의 잔치를 하였다” 에 의하였다. 하나노엔 (はなのえん) 이라 읽는다.

.花宴：巻頭に「『桜』の宴会をした」に基づいた。ハナノエンと読む。

金：제 8 첩 꽃놀이 (花宴)

‘궁중의 남전에서 벚꽃놀이 행사가 있었습니다.’ 란 서두에서 제목이 붙었다.

第八帖 花宴：「宮中の南殿で花見の行事がありました。」という冒頭で題目が付けられた。

田訳、金訳の解説で宮中行事であることがわかるが、「花見」では、前巻同様、野外の

春遊を想像させる。また、その宴が光が朧月夜と出逢うきっかけであり、歌を交わしたとにふれることが望ましい。

第九巻 葵

新全集：葵：賀茂の葵祭の当日、源典侍と源氏の交した歌「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける」「かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを」による。

田：9.규 (葵) 는 아욱과에 속하는 접시꽃 등의 총칭이다. 여기의 규 (葵) 는 하무 (賀茂) 의 규제 (葵祭) 를 뜻한다. ‘만나는 날’ 이라는 뜻이기도 하다. 아오이 (아おい) 라 읽는다. 葵：葵は葵科に属する葵花などの総称である。ここでの葵は賀茂の葵祭りを意味する。「会う日」という意味でもある。アオイと読む。

金：제 9 칩 접시꽃 축제 (葵)

葵는 ‘아오이’ 라고 읽고 ‘접시꽃’ 을 뜻한다. 가모의 접시꽃 축제 당일 겐지와 겐전시가 주고 받은 노래에서 이런 제목이 붙었다. ‘아오이’ 는 또 겐지가 처음 결혼한 부인의 이름이기도 하다 第九帖 葵：葵は「アオイ」と読み、「葵花」を意味する。賀茂の葵花祭り当日源氏と源典侍がやりとりした歌でこういう題目が付けられた。「葵」はまた源氏が始めて結婚した妻の名前でもある。

葵祭りでの車争いが原因で、六条御息所が葵上にとりつき命を奪う巻である。葵の上とは、『源氏物語』内でそう呼称されているのではなく、この巻の主演として存在するための通称である。「あふひ」には、「逢ふ日」「葵」とが掛けられている。「逢ふ日」は若紫との結ばれたことも示す。源典侍の歌はその両方の意味が込められていることを指摘すべきであろう。

第十巻 賢木

新全集：賢木：野宮で御息所と源氏の交した歌「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ」「少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ」による。

田：10.비쭈기나무. 신성한 나무로 여겨 신사의 경내에 심었다. 육조여식소의 노래에 나온다. 榊 (사카기) 라는 글자를 만들었다. 坂木도 ‘사카기’ 라 읽는다. 10. 坂木：榊. 神聖な木とされ、神社の境内に植えた。六条御息所の歌に出る。榊 (サカギ) という文字を作った。坂木も「サカギ」と読む。

金：제10칩 비쭈기나무 (賢木)

비쭈기나무는 예로부터 신성한 나무로 여겨져, 재궁이 되면 정원의 사방에 비쭈기나무를 심어 부정을 피했다. 第十帖 賢木：榊は昔から神聖な木として思われ、齋宮になると庭の四方に榊を植えて不浄をを避けた。

賢木は、六条御息所が潔斎に籠っていた野宮の周りを囲っている神の象徴の木であり、光がその禁囿の場所を訪れる巻である。「榊」の木は、韓国では、特別の意味を持たないが、日本語「さかき」からは神性をすぐ想像できることを解説している点は的確である。

第十一卷 花散里

新全集：花散里：源氏の歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」による。

田：11.겐지 애인의 하나. 그 여인의 이름이다. 겐지의 노래에 나온다. 하나치루사토(はなちるさと)라 읽는다. 11. 花散里：源氏の恋人の一つ。その女人の名前だ。源氏の歌に出る。ハナチルサトと読む。제 11첩 꽃 지는 고을(花散里)

金：花散里는 ‘하나치루사토’라 읽고, ‘꽃 지는 고을’이란 뜻이다. 동시에 ‘하나치루사토’는 겐지의 사랑을 받은 정인, 부인 가운데 한 사람이다 第十一帖 花散里：花散里は「ハナチルサト」と読み、「花が散る郡」という意味だ。同時に「花散里」は源氏に愛された情人，婦人の中の一人だ。

金訳が「花が散る里」と指摘しているが，花が散るという言葉から盛りを過ぎた女性の意味を説明すべきである。だからこそ光が生々しい男女のやりとりとは違う次元の会話を楽しみ，癒してもらっていることを指摘すべきである。

第十二卷 須磨

新全集：須磨：源氏の須磨退去による。「須磨」の地名を詠み込んだ和歌が，都を離れた源氏と女性たちとの間に交された消息文の中に数首ある。

田：12.일본의 지방 이름. 신호(神戸)의 서부에 있는 해안지대. 겐지의 수마유적에 의하였다. 수마(すま)라 읽는다. 12. 須磨：日本の地方の名。神戸の西部にある海岸地帯。源氏の須磨幽寂生活による。スマと読む

金：제12첩 스마(須磨)

‘스마’(須磨)는 겐지가 도읍을 떠나 유적생활을 한 곳이다. 도읍을 떠난 겐지와 도읍에 남아 있는 여인들이 주고받은 편지에 ‘스마’라는 지명을 읊은 노래가 몇 수 있다. 第十二帖 須磨：須磨は源氏が都を去って幽寂生活をした所だ。都を去った源氏と都に残っている女人達がやりとりした手紙に「須磨」という地名を詠んだ歌が何首ある。

平安時代の人々が在原行平などの説話から貴種流離の里、歌枕として須磨をイメージしていたことを解説することが望ましい。

第十三卷 明石

新全集：明石：源氏が須磨から明石に移ったことによる。和歌にも数首、「あかし」が詠み込まれている。「浦伝ひ」の異称も。

田：13.명석 (明石) 은 수마 (須磨) 에서 8km 서쪽에 있는 지명이다. 파마 (播磨：兵庫縣) 에 있다. 겐지는 수마에서 명석으로 옮겼다. 아카시 (あかし) 라 읽는다. 13. 明石：明石は須磨から8km西にある地名だ。播磨（兵庫縣）にある。源氏は須磨から明石に移った。

金：제13첩 아카시 (明石)

‘아카시’ 는 스마와 인접한 곳의 지명이다. 겐지는 스마에서 아카시의 뉴도의 마중을 받아 아카시로 거처를 옮긴다. 第十三帖 明石：「アカシ」は須磨と隣接した所の地名だ。源氏は須磨で明石の入道の出迎えられて明石に居所を移す。

須磨が畿内で、明石が畿外という地域的格差があることを指摘してほしい。京から見れば遙かかなたの異境の地である点、「明石」に暮らし「明かす」が掛けられていることを解説してほしい。

第十四卷 濤標

新全集：濤標：「濤標」は「水脈の串」。通行する船に水脈や水深を知らせるために立てた杭。古来、難波の濤標が有名。住吉詣での折の源氏と明石の君の贈答歌、「みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな」「数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ」による。

田：14.영표는 수로 (水路) 를 표시하기 위해 물 속에 박은 말뚝. 주길신사에 참배하였을 때 겐지와 명석의 군이 부른 노래에 나온다. 미오쓰쿠시 (みをつくし) 라 읽고, ‘몸을 다한다’ 는 뜻도 된다 14. 濤標：濤標は水路を表示するために水の中に打った杭。住吉神社に参拝したとき源氏と明石の君が歌った歌で出る。ミヲツクシと読み、「身を尽くす」という意味にもなる。

金：제14첩 수로 말뚝 (濤標)

수로 말뚝은 오가는 배에 물의 흐름과 수심을 알리기 위해 세운 말뚝이다. 예로부터 나니와의 수로 말뚝이 유명하다. 스미요시를 참배한 겐지와 아카시 아씨가 주고받은 편지에서 이 제목이 붙었다. 第十四帖 濤標：水路の杭は行き来する船に水の流れと

水深を知らせるために立てた杭だ。昔から難波の水路の杭が有名だ。すみよしを参拝した源氏と明石お嬢さんがやり取りした手紙からこの題目が付けられた。

歌語の「身を尽くす」の意が掛けられていることを指摘すべきであり、それが明石君への光の思いの表れとして詠みこまれていることを解説してほしい。

三

以上、試みに「滯標」までの翻訳された各巻の解説を考察してきたが、歌語に基づいた巻名の解説がいかに難しいかがわかる。では、どのような巻名の翻訳が最適なのだろうか。

韓国語圏の人々も漢字への理解があり、ハングルが専らの今日にあっても、漢字をみてイメージを浮かべることができる。ここで、仮りに巻名の漢字一つ一つの意味をハングルで解説してみる。

例えば、桐壺の場合、桐は「오동나무 (桐の木)」という意味で、「동 (ドン)」と読み、壺は「병 (瓶)」という意味で、「호 (ホ)」と読む。

桐の字では、桐の木を連想し、壺の字では「병 (瓶)」、「술병 (酒瓶)」、「박 (ふくべ)」、「단지 (小さい素焼きの壺)」、「투호 (投壺)」、「물시계 (漏刻)」、「주전자 (湯沸かし)」、「예의 (礼儀)」を連想し、これらの組み合わせの意味では、まったく局のイメージがわからない。

さらに、帚木の場合、帚は「비 (箒)」という意味で、「추 (チュ)」と読み、木は「나무 (木)」という意味で、「목 (モク)」と読む。帚は、「비 (箒)」、「빗자루 (箒の取っ手)」、「대싸리 (ほうきぎ)」、「별 이름 (星の名前)」、「소제하다 (掃除する)」、「쓸다 (掃く)」の意であり、それに木を連想する「木」の意味をつけてもやはりまったく意味が通じない。このように漢字へのある程度の理解があっても、日本人がイメージする世界とは異なる訳になってしまう。まして巻名が持つ歌語的世界を反映した訳は、不可能である。

以上考察してきたが、結論はやはり、巻名を漢字として翻訳することには限界があることがわかる。巻名のよみ方をハングル音で再現し、巻名にこめられた歌語的世界を解説していくことが一番ふさわしいのではないだろうか。

注

- 1) 『源氏物語』の巻名については、池田亀鑑氏が紫式部ではない後人説を唱え（『源氏物語事典下』「巻名と巻序」1956年、東京堂）、玉琢彌氏は紫式部が付けたものとし（『源氏物語評釈第二巻』「若紫」1965年、角川書店）『新潮日本古典集成源氏物語』（1976年、新潮社）もこれを指示する。
- 2) 清水婦久子氏「源氏物語の巻名と古歌」（2000年、風間書房『源氏物語研究集成 第九巻源氏物語の和歌と漢詩文』）、同「源氏物語の和歌的世界—歌語と巻名」（2001年、和泉書房『王朝文学の本質と変容 散文篇』）、同「源氏物語の巻名の由来」（『青須我波良』59帝塚山大学2004年3月）など一連の論文。その中で、歌語として認知されていない「夕顔」も「朝顔」との対比で用い、その「朝顔」も、一般的な華やかな印象ではなく盛りをすぎた朝顔という新しい観点からの捉え方をしていることなどを詳細に考察している。しかし、それらも前提に歌語としての意識があってこそその展開である。
- 3) 田溶新訳『源氏物語』1・2・3（ナナム出版 1999年）、金蘭周訳金裕千監修『源氏物語』（全10巻・図書出版ハングル社、2007年）、金鐘徳訳『源氏イヤギ』（지식을만드는지식 2008年）。以下田訳、金訳、鐘訳と省略する。
- 4) 紙面の都合上、抄訳である任氏の巻名の翻訳はとりあげなかったが、任訳では、桐壺巻を「기리쓰보」、帚木巻「하와키기」のように日本語の音をすべてハングル音でしめしている。任氏の見識の表れであり、本文では、巻名と同じの語句を和歌や文章の中で翻訳されている。（任チャンシユ訳『源氏物語』（サムリ出版）2005年）。
- 5) はじめての韓訳は、柳呈田訳『源氏物語』上・下「新装版世界文学全集」四、五、（乙西文化社1975年である）だが、現在絶版しており本稿では入手できなかった。
- 6) 李芝善氏「韓国語訳『源氏物語』における巻名の訳し方について」（『日本アジア研究』第四号2007年3月）。
- 7) 瀬戸内寂聴訳『源氏物語』（講談社・2007年）。
- 8) 李氏論文注6参照。
- 9) 金鐘徳氏「韓国における『源氏物語』翻訳と研究」（『韓国軍事文化研究』2009年）
- 10) 田溶新氏が参考にした日本古典文学全集にもほぼ同文の巻の由来の説明文が掲げている。金訳は、注7の瀬戸内寂聴訳を翻訳しているが、瀬戸内訳には巻名の解説がない。
- 11) 新古典文学全集『源氏物語』（小学館）を「新全集」、田溶新訳を「田」、金蘭周訳を「金」と略称した。
- 12) 『伊勢物語』の五十段「紫」の段の「目もはるに」歌の影響か。しかし紫草そのものは、夏に小さな白い星型の花を咲かせる可憐な草である。